

日本の化粧意識の近代化をめぐる比較史的考察—清潔習慣の展開をめぐる

鈴木 則子

奈良女子大学 生活環境学部

【目的・背景】

私はこれまでの研究で、江戸時代後期の庶民の化粧意識が、従来の嗜みとしての化粧の域を越えて、自分の身体をどれだけ価値あるものに演出するか、という積極的意識に変化することを明らかにしてきた。その背景には社会全体が、身体は自分の努力次第でより価値のあるものへ変えられる、という近代的な身体観にからめ取られていくという変化があったことも指摘した。現在は江戸後期の化粧意識の変化を、欧米・韓国・中国の化粧意識との比較の中で考察することによって、化粧意識の近代化の日本の特徴を明らかにすることをめざしている。

この研究報告においては、日本社会における「清潔」概念の展開に焦点をあて、それが美容意識にどのような影響を与えたのか、またヨーロッパの「清潔」と「化粧」の関係の仕方との比較を行う。

【結果・考察】

江戸時代の教育の場では、女子に対しては女訓書が体を洗って清潔にすることを説いたが、男子用の教科書はそのような言説を含まない。これは清潔が、「婦容」という女子の徳目の一つと、深く結びついていたからである。江戸時代後期の化粧書『都風俗化粧伝』は、白く脂浮きしない肌をめざす手入れ法や、体臭を消すための薬を教授し、同時期の『近世風俗志』は、当時の薄化粧や香油を使わない髪型の流行を指摘する。それは素の美しさを追求する、徹底した身体管理によってはじめて実現しうる美だった。この新しい化粧風俗は、「婀娜」・「意気」といった美意識に通ずる。従来、江戸の薄化粧の契機は、天保改革の風俗取締との関連で説明されてきたが、江戸後期の入浴習慣の普及と、それに伴う清潔の徹底という側面も指摘されるべきであろう。

一方ヨーロッパでも19世紀以降、薄化粧の流行を見るが、それは垢や化粧品で毛穴を塞がないことが医学的に奨励され、透き通った無臭の身体を志向するブルジョアジーの台頭が、大きな影響を与えていた。これは日本の清潔文化と薄化粧の流行が、遊郭を中心に庶民文化として花開いたことと、大きな相違を見せる。